

# 2018 夏が好き！本が好き！！



平成30年7月3日  
秋草学園高等学校 図書館

恒例の「夏が好き！本が好き！」の季節がやってきました。今年の夏も先生方から、みなさんへのおすすめ本がこんなにたくさん集まりました。紹介文を読んでいると、どの本もおもしろそうで読書欲がどんどん湧いてきます。その湧き起こった読書欲でもって、思う存分、本を楽しむ夏を送ってください。また、普段接する機会の少なかった先生とも、このおすすめ本をきっかけにしてブックトークを楽しんでほしいです。紹介していただいた本は現在、図書館にて展示中です。夏の長期貸出が始まっていますので、どんどん借りていってください。貸出冊数は5冊、返却日は9月4日（火）です。

小久保校長先生のおすすめは…

①376-フ 『オックスフォード&ケンブリッジ大学世界一「考えさせられる」入試問題』  
ジョン・ファーンドン || 著 河出書房新社

この本は 60 問の実際にオックスブリッジ(オックスフォードとケンブリッジ大学)の入試の面接官が出した問題が掲載されています。質問の主旨は、大学側が本当に賢い生徒つまり得意即妙の対応ができる学生を見つけることにあるそうです。この問題が他の大学と違って特別なのは、素晴らしい思考力を刺激するところにある点です。例えば面接官に「あなたは自分を利口だと思いませんか？」と聞かれたらどう答えるか。謙虚に「いいえ」と答えたらその言葉の通り取られてしまう、しかし、自分が利口だと確信している人はふつう賢明でない等々「利口」ということばの背景等を通してよく考えて答えなければいけない点が面白いと思います。この書の質問はびっくりする問題もあれば好奇心をそそられる問題、奇問も愚問…様々な問題があります。すべてに共通していることは考えなくてはならないこと。質問の意図が本当はどこにあるのかよく考えなくてはならないことにあります。この本を通して考える楽しさを学んで欲しいと思います。

実際、人間は考えることが好きなのかもしれませんね。

②953-カ 『ペスト』 アルバール・カミュ || 著 新潮社

カミュの創作した物語では、フランス領のアルジェリア(当時の)港町オランでペストが発生。植民地総督府からの命令は、市丸ごと閉鎖しペスト地区として隔離せよというものだった。市民は追放され監禁されたのだった。人間はこの災いという不条理をどう乗り越えることができるか…。

この作品は 1947 年に書かれたものです。第 2 次世界大戦が終わって間もない時に書かれただけに、ペストという災厄が悲惨な戦争とかぶってきます。時代が変わっても、遠いアルジェリアの町で起きた疫病の話というだけでなく、震災や原発事故による放射線の恐怖等々現代の社会を襲う災厄の中で人間はどのように生きるべきかを考えるきっかけになればと思います。

③280-イ 『世界を変えた 10 人の女性』 池上 彰 || 著 文藝春秋

この本は 2012 年末から 2013 年初めにかけて、お茶の水女子大学でおこなわれた特別講義をまとめたものです。世界を変えた 10 人の女性のなかには皆さんもよくご存知の「ナイチンゲール」「マザーテレサ」、また皆さんが初めて耳にする女性たちもいるのではないかと思います。この本をお勧めする理由の一つに、「講義のはじめに」のなかで池上氏が述べていますが、『世界を変えた 10 人の女性』というタイトルをつけなければいけないところに社会の限界がある、「女性」と限定して語らなければならないところにいろいろな問題があるという点です。そういう問題意識のもとでこの本にでてくる女性たちがどのような生き方をしたのかを学んでほしいと思います。

丸山教頭先生のおすすめは…

389-ジ 『今こそ知りたいアイヌ ～北の大地に生きる人々の歴史と文化～』 時空旅人編集部 || 編 三栄書店

先日、久々に書店を覗き、あれこれ本を物色していると、書名の「アイヌ」の文字が目にとまった。最近、日本の先住民族「アイヌ」についてあまり気にしていなかったが、以前は、1997 年に「アイヌ新法（アイヌ文化振興法）」が成立したこともあり、当時、何かと話題になっていたので、時間をとってアイヌ民族の歴史・文化について詳しく授業を行っていた。新法成立までは明治時代の「北海道旧土人保護法（旧法）」によって民族としてのアイデンティティーを失いかけていた。そんな中、アイヌ民族、初の国会議員である萱野茂氏によって旧法の廃止が提案され、新法が前回一致で可決された。さて、「アイヌ」入門書として最適の本書は、写真や解説も多く、大変読みやすく、アイヌの人々の生活・文化・歴史を知る事が出来ます。是非、先住民族アイヌの人々について学んでほしいです。興味をもった人は、萱野茂著『アイヌの碑』（朝日文庫）もぜひ読んでほしいです。

浅見先生のおすすめは…

726-ド 『有名すぎる文学作品をだいたい10ページくらいの漫画で読む』 ドリヤス工場 || 著 リイド社  
超有名な文学作品、読まなくても理解できてしまう、便利な本です。

安達大樹先生のおすすめは…

913.6-サ 『一瞬の風になれ』 佐藤多佳子 || 著 講談社

幼い頃からサッカー一筋だった主人公、神谷新二。憧れだった兄と一緒に日本代表で戦いたいという大きな夢は中学3年で散ってしまう。やりたいものがなくなってしまった新二。そんな彼が高校で始めたのが…、陸上！？

陸上競技ド新人の新二が全国大会への殴り込み！部活に、恋に、友情に、高校生活を全力疾走！

陸上競技についてわかりやすく書いてあるので、誰でも気軽に読めます。先生も味わいたくて仕方なかった真っ向勝負の青春ライフ！皆さんもこの本でこの夏、心も体も熱くしましょう！

伊久美先生のおすすめは…

767-オ 『超歌手』 大森 靖子 || 著 毎日新聞出版

「あなたの魅力が誰かに伝わらないのはなぜだと思いますか？あなたに魅力がないからじゃないです。あなたの魅力を、あなたを含む誰も、説明できていないからです。」（「まえがき」より引用）

自分に自信がある人はもちろん、自分に自信がない人にこそ読んでほしい本です。

稲本先生のおすすめは…

480-イ 『残念ないきもの事典』シリーズ 高橋書店

最初、興味深々で読み始めました。

すると、残念というより「そーなんだ……↓↓↓」という気持ちになりました。

そんなわけで、気持ちがアガっているとき、テンションMAXのあなたには、おすすめです。

（動物も見た目じゃないってことだな（泣））

今井先生のおすすめは…

913.6-イ 『陸王』 池井戸 潤 || 著 集英社

TVドラマでも大ブレイクした、ヒットメーカー池井戸潤の作品です。

足袋の生産、日本一の行田市にある足袋工場の物語。マラソンランナーと絡めて倒産寸前の会社を社長の熱意と社員の力で立て直していきます。

実はモデルとなった会社は私の実家のすぐそばにある足袋屋でした。今でも多くの観光客で賑わっています。ドラマもいけど本もいいですよ。



大久保先生のおすすめは…

728-ア 『一生感動 一生青春』 相田みつお 著 文化出版局

一文一文意味深く大変心に残る内容だと思います。特に人生の生き方を考えさせてくれる一冊です。

大庫先生のおすすめは…

913.6-ア 『鼻』 芥川 龍之介 著 角川書店／新潮社

芥川龍之介の『鼻』という作品を読んだことはありますか？皆さんが1年生で学んだ『羅生門』と同じく「人間のエゴイズムの世界」を描いた作品です。この作品は第4次『新思潮』創刊号に発表されましたが、その時に芥川龍之介の師である夏目漱石から「このようなものをもう2、3ならべてみなさい。文壇で類のない作家になれます。」と激賞された作品です。この作品を読んで、芥川龍之介が描いた「人間のエゴイズムの世界」を感じてください。

鹿島先生のおすすめは…

689-デ 『ディズニーランドであった心温まる物語』 香取 貴信 著 あさ出版

東京ディズニーリゾート35周年だからこそ、この本を読んで遊びに行ってください。一層楽しめると思います。

栗山先生のおすすめは…

913.6-ク 『手紙屋：私の受験勉強を変えた十通の手紙 蛍雪篇』 喜多川 泰 著 ティガ-・トエティ

主人公は高校2年の女子高生です。何故、勉強が必要なのか、どうやって勉強するのか etc…

勉強のモチベーションが上がります！是非、是非、読んでみてください！

迫先生のおすすめは…

104-コ 『中動態の世界 意志と責任の考古学』 國分 功一郎 著 医学書院

能動（～する）でも受動（～される）でもない「中動態」は、実はかつて多くの言語に含まれ、しかし次第に英語などの印欧諸語からは姿を消していった表現形態だという。そしてこの「中動態」は「する～される」という対立とは根本的に異なる基準に則って能動態と対になっていたのだ…。この説明の時点で興味が湧いたあなたは迷わず読んでほしい。多分趣味が近い。面白さは保証します。ただし、この本は単なる文法解説書とはまったく異なるということも強調しておきたい。本書は「中動態」の衰退の歴史を辿る中で、今私たちが所与のものとして、時には人間の条件であるかのように捉えがちな「意志」という概念について改めて考えることを目指している。良い読書の常として、これを読む前後では見える景色が多少変わるはずだし、私にとってそのような書籍との出会いは久々だった。

一つの文法項目を足掛かりにどこまでも視野を広げていく著者の発想、好奇心、また先人の業績に対する敬意と批判的な視線は驚くべきもので、この大胆さと真摯さは文系の学問を志す全ての人にとって大きな指針になると思う。読む上ではそれなりの読解力とある種の忍耐が求められるけれども、言葉と心のあり方、言葉と世界の関わりについて関心を持つ人なら、その辛抱を補ってあまりある充実した読書体験が出来ることは間違いない。ちょっとした登山に出掛けるつもりで、ぜひ取り組んでみてほしい一冊。

佐久本先生のおすすめは…

『韓国語 学習ジャーナルhana』 HANA

韓国語学習ジャーナルhanaは現在Vol. 26まで出版されている雑誌です。約2ヶ月に1回ぐらい、不定期に出版されています。（CDつき）

韓国語を学習する人向けの雑誌ですが、本の中には、特集記事に加えていろいろなコーナーがあり、流行の音楽や食べ物、人気のお店等、毎回新しい発見があり、いまの韓国の情報もとても充実しています。

鈴木信滉先生のおすすめ本は…

913.6-イ 『ぼくのボールが君に届けば』 伊集院 静 著 講談社

高校生の時に受けた模試で出願された文章だったと記憶しています。コミュニケーションはキャッチボールのようなものです。みんなは、きちんとストレートボールを相手に投げていますか？ただそのボールは育ってきた環境で多少変化します。変化しようとしまい相手の胸に投げ込みたいものです。ぼくがみんなに伝えたいこと、とどいてほしいなあ。

染谷凌平先生のおすすめは…

913.6-ヨ 『ハナミズキ』 吉田 紀子 著 幻冬舎

映画にもなっている作品で、ページ数も少ないのでかなり読みやすいお話だと思います。北海道出身の主人公二人の世界を舞台にした（基本は日本ですが…）お話です。

関口先生のおすすめは…

①913.6-ツ 『盲目的な恋と友情』 辻村深月 著 新潮社

“あの人が死んでしまったら、とても生きていけないと思った、あの幸せの絶頂の一日から六年が経ち、あの人は死んでしまったのに、私は、まだ、生きている。生きて、あの人とは叶わなかった、純白のウエディングドレスを着て、あの人ではない彼に、誓いのキスのため、ボールを上げられるのを待っている。”

という書き出しから過去の歳月を「恋」と「友情」という2つの視点から描いた物語で、どちらの視点もタイトルにあるように“盲目的”である種の狂気を孕んでいる。何かに“盲目的”になっている人もそうでない人もぜひ一読を。

②913.6-カ 『いびつな夜に』 加藤 千恵 著 幻冬舎

昨年に引き続き加藤千恵さんの本になりますが、この本は数多くの「短歌とその短歌にまつわるショートストーリー」から構成されています。1つ読むのに3～5分で読めてしまうので、かなりライトな感じで楽しめると思います。その一方で、それぞれの物語の中には多種多様な感情や想いが渦巻いていて、思いがけず切なくなったりため息を漏らしたりしてしまいます。そんな物語たちが描く場面は決して特別なものでなくありふれたもので、それこそが加藤千恵さんの描く等身大の感性のようにも思われます。ぜひ読んでみてください。

高橋貴与人先生のおすすめは…

159-ヒ 『生きていくあなたへ 105歳どうしても遺したかった言葉』 日野原 重明 著 幻冬舎

昨年他界された日野原先生の著作です。死を目前に紡がれた、生涯現役、渾身の最後のメッセージです。「どんな苦しみの中にも、生きていることは喜びに満ちている」多くの経験を重ねてこられた方の言葉は、心に重く響きます。

高橋舞先生のおすすめは…

159-コ 『10代のうちに考えておくこと』 香山 リカ 著 岩波書店

中高生のうちというのは、学校のことや勉強のこと、友だちのことや自分のことなどの悩みや不安がつきものです。それはいつでも誰にとっても同じことで、みんなが経験するものです。壁にぶつかったとき、悲観的になるばかりではなく一度立ち止まってゆっくり考えてみると良い方法が見つかるかもしれません。そんなときにぜひ読んでもらいたい本です。



# No.3

高橋優美花先生のおすすめは…

914.6-サ 『**×切本**』 左右社

文章が、書けない。そんな場面に直面したことはないだろうか。人間生きていれば何かしらの文章を書かなければならない時がある。高校生の場合は、小論文など最たるものだろう。時に書くということは、上手く筆が進むことがあれば、そうでないときもある。前者の場合はいいとして、問題は後者だ。こんなときは次第に気持ちが落ち込んでくる。なぜ書けないのか。自分が情けなくなってくる。時は過ぎていくばかり……。

この本は、明治から現在に至る書き手たちの×切にまつわるエッセイや対談、手紙がまとめられている。「文章が、書けない！」——そんな悲鳴を上げながら、×切と格闘していく書き手たちの奮闘集でもある。かけないのは自分だけではない。先人たちもそうだったのだ。だから、かけないときには気分転換にでも本書を読んでみると良い。

遠山先生のおすすめは…

914.6-ウ 『**最終講義 生き延びるための七講**』 内田 樹 著 文藝春秋

語りかける文体。私たちが日頃思っている言葉でなかなか表現できないことを内田氏は見事な比喻で伝えてくれる。全てを読むことが難しければ、自分にとってわかるものだけをピックアップして読んでみよう。何か 1 つ発見があるかもしれない。

中村先生のおすすめは…

913.6-オ 『**びりっかすの神さま**』 岡田 淳 著 偕成社

毎日、そこで過ごしている人には、わからないのに、ふいに、よそからやってきた人が気づく、そんなことがあります。この物語は、転入生が、教室で、いままでだれも見なかったものを見てしまうことから始まります。そのきっかけは、教室の片隅に隠れてしまいそうな存在の子。その子に対する意地悪やプレッシャー、そこから解き放たれる方法を得ると、そして意外な展開に主人公たちが導かれます。

この夏安心して読める、と言ってもすぐに読み切れる本です。シリーズ本も含めて図書館にありますので、どうぞお読みください。

長野先生のおすすめは…

361-ナ 『**シャーデンフロイデ 他人を引きずり下ろす快感**』 中野 信子 著 幻冬舎

「パッシングは麻薬的」とオビに書かれていますが、「シャーデンフロイデ」とは、他人を引きずり下ろしたときに生まれる快感のことです。芸人や著名人の失言や不倫、ちょっとした失敗を、ネット上で糾弾し、炎上させて喜びに浸る人が急増しました。実はこの行動の根幹には、脳内物質である「オキシントン」というホルモンが深く関わっています。なぜ人間は人を「拒む」のか。なぜ人間は人の不幸を喜ぶのか。現代の病理の象徴である「シャーデンフロイデ」の正体を、本書は明かしてくれます。

奈須先生のおすすめは…

336-ニ 『**戦略思考トレーニング**』 西村 克己 著 SBクリエイティブ

経営戦略、マーケティング、ビジネスモデルなど、本当にあった「まさか!」「なるほど!」の実例から、自分のアタマで考える訓練まで、設問を解いていくうちに、戦略的思考が身につく、まったく新しい入門書です。

原口先生のおすすめは…

933-マ 『**不思議な少年**』 マーク・トウェイン 著 岩波書店

天使という名の悪魔(=不思議な少年)に翻弄される人間の“闇”を描いた晩年の作品です。天使の語る人の悪、醜さ、愚かさを風刺した“黒い”ストーリーを楽しんで下さい。

早瀬先生のおすすめは…

913.6-イ 『**死神の精度**』 伊坂 幸太郎 著 文藝春秋

1. CDショップに入りびたり、2. 苗字が町や市の名前であり、3. 受け答えが微妙にずれていて、4. 素手で他人に触ろうとしない。——そんな人物が身近に現れたら、それは死神かもしれませぬ。

1 週間の調査ののち、その人間の死に<可>の判断をくたせば、翌8日目には死が実行される。クールでどこか奇妙な死神 千葉が出会う6つの人生。

映画化、舞台化されています☆短編集でサラッと読めます☆「伊坂幸太郎読んでみたいけど長編は…」って人にもオススメです☆

平田先生のおすすめは…

933-フ 『**フォークナー短編集**』 ウィリアム・フォークナー 著 龍口直太郎 訳 新潮社

アメリカ南部の退廃した生活や暴力的犯罪の現実を斬新で独特な手法で描いた8編を収録した1冊です。私は大学時代、文学の授業でレポートを書く時の題材に選びました。短編集なので、本を読むのが嫌いという人も気軽に読めますし、アメリカの中で起きた問題について考えさせられます。

福島先生のおすすめは…

Y599-サ 『**子どもへのまなざし**』 佐々木 正美 著 福音館書店

子どもとどう接すればいいか?多くの親が悩むことですが、保育士や幼稚園教諭を目指す人も同じような悩みを抱えて、保育現場で奮闘しています。私自身も4人の子どもを育てていますが、子どもたちに振り回されて葛藤の毎日です。保育書には様々ありますが、やはり実践を通したものには説得力があるように思います。紹介する本は、そんな観点から選んでみたものです。本は、読み手の考え方や感性によっても評価が分かります。自分にとって良い本になったかどうかは、自分自身で評価してみてください。著者の佐々木正美先生は、精神科医としてご活動され、保育園や幼稚園、学校や児童相談所など、数多くの現場で子どもたちや保育者と接してこられた方です。臨床現場で数々の症例を見て、さらにその結果に基づき自身の子育ても行ってきた方です。「理論」「実践」「検証」に基づいた言葉や文字には説得力が感じられます。良かったら読んでみてください。

升田先生のおすすめは…

493-オ 『**診療室にきた赤ずきん**』 大平 健 著 新潮社

精神科医の著者が、ももたろうや赤ずきん、うらしまたろうといったおとぎ話や昔話を通して患者の心を癒すというエピソード集です。誰もが幼い頃に触れた物語が登場します。物語療法の不思議さと面白さが味わえます。

眞野先生のおすすめは…

914.6-ム 『**村上春樹雑文集**』 村上 春樹 著 新潮社

「壁と卵」と聞いて、皆さんはどんな情景を、どんな意味を想像しますか。また、「高くてかたい壁」と、「壁にぶつかって割れる卵」。この2つが目の前にあるとき、皆さんはどちらを選びますか。

クラスや部活、家族や会社。私達は何かしらの集団の中で生きています。そんな集団の中は守られている反面、自分の意思を抑えなければいけなかったり、理不尽な風に吹かれて飛ばされそうになることもあります。

そんな日常のちょっとした生きづらさやもどかしさを、美しい言葉で代弁してくれる、そんな一冊です。



## 松永先生のおすすめは…

289.1-オ 『だから、あなたも生きぬいて』 大平 光代 著 講談社

著者は中学2年の時に、いじめを苦にして自殺を図る。その後、非行に走り、16歳にしてなんと極道の妻となる。しかし、そこから養父・大平浩三郎と出会って立ち直り、中卒の学歴を乗り越えて、「宅建」、「司法書士」に次々と合格、29歳の時には一発で「司法試験」にも合格する。そして、現在は非行少年の更生に努める弁護士として、活躍中。

そんな大平光代さんが自身の半生を描いた手記です。読んでみてください。

## 三ツ木先生のおすすめは…

783-ヤ 『友情 平尾誠二と山中伸弥「最後の一年」』 山中 伸弥 / 平尾 誠二 / 平尾 恵子 著 講談社

告げられた余命はわずか3ヶ月。生還か、永遠の別れか。

「自分の全力をかけます。この僕の言うことを聞いてください。」(山中)

「僕は山中先生を信じるって決めたんや」(平尾)

2016年10月に永眠した、元ラグビー日本代表監督の平尾誠二さん。死の影が日々迫るなか、ノーベル賞受賞者の山中伸弥さんが彼を支え続けた、男の友情の記録です。

来年、2019年には日本でラグビーワールドカップが行われます。平尾さん、観に行きたかっただろうな…と思うと涙が止まりませんでした。ぜひ読んでみてください。



## 宮本先生のおすすめは…

913.6-ミ 『潮騒』 三島 由紀夫 著 新潮社

初めて読んだのは、私が高校生の頃でした。

当時、三島由紀夫は読んだことがありませんでしたが、母のお奨めで、読んでみたところ読み終わった後かなりの衝撃を受けました。有名なシーンがあるのですが、皆さんも読めばきっとわかるシーンだと思います。

ドキドキするのに何か怖いような十代の頃にしか味わえない感覚なのではないかと思う。純愛物語なので皆さんもきっと読みやすいのではないかと思います。夏休みの息抜きにでも読んでみてはいかががでしょうか？

## 薬師先生のおすすめは…

498-マ 『医者教える食事術 最強の教科書』 牧田 善二 著 ダイアモンド社

太りたくない人、健康でいたい人が知っておくべき食の真実がズラリ…。

脂肪は食べても太らない、太る原因は「糖質」だ！詳しくは手にとって読んでみてください。

## 結城先生のおすすめは…

913.6-セ 『プリズムの夏』 関口 尚 著 集英社

むかしから今までを思い返して、自分が大きく変化したか、というと、そうでもない。高校生の頃思っていた28歳の僕はずっと大人なイメージだった。

しかし、考えてみると大人ってなんだ？この先も自分の根は恐らくずっと変わらないのだろうという確信だけが強まってく。皆さんも将来きっとそう思うだろうな。

けれども、成長したなと思う時はある。それはいつでも、失敗して、挫折して、何かをはっきりと失った時だ。

この小説の主人公の少年も、高3のひと夏に何かを失う。恋や友情といった青春の物語と見せかけて、本書が投げかけるテーマには明るい夏の光によって生まれる濃い影のような暗さがある。あらずしを読まずにまずは手にとってみてほしい。

プリズムというのは、ガラスなどでできた透明の三角柱で、光をこれに当てることで屈折、分散させたりすることができる。プリズムを通した光はスペクトル(虹)に形を変えてあらわれる。

プリズムの夏を過ぎて僕たちも少しずつ変化するのだろう。喪失は悲しいけれど、まだ知らない未来の虹に興味はある。

## 湯本先生のおすすめは…

913.6-サ 『風に立つライオン』 さだ まさし 著 幻冬社

世の中に数多くの本はあるけれど、自分にとっての「これ」と思える一冊とはなかなかめぐり合えません。この風に立つライオンはそんな数少ない一冊です。

少し前に映画化されているようですが、二時間程度でこの話をまとめるのは難しいと思うので、是非本で読んでみてください。読めば“心”が洗われる、そんな一冊です。

## 山崎先生のおすすめは…

『人間は脳で食べている』 伏木 亨 著 ちくま書房

食を「情報」という側面にとらえ、「おいしさ」の分析を試みた本です。

人間が食物をおいしく感じるか否かは、単なる味覚だけでなく、おいしさの要因や、生理メカニズム、文化的意味などの情報が関係していると分析しています。

美味しさを科学的に説明していて、普段普通に食べている食に関して違う角度から考えるきっかけとなります。「おいしさ」っておもしろい！！

## 鈴木司書のおすすめは…

289.3-ホ 『ホーキング、自らを語る』 スティーヴン・ホーキング 著 あすなろ書房

今年3月、天才科学者ホーキング博士が76歳でお亡くなりになりました。理論物理学者の彼はブラックホールの特異点定理やホーキング放射理論等を発表し、宇宙の始まりを無境界仮説によって説明しました。その内容は難しすぎてなかなか歯がたたないのですが、一般人に出したメッセージの中には興味深いものがありました。地球温暖化は引き返せないレベルに来ていることや、宇宙人とコンタクトを取るのは危険があること、AIの完成は人類の終焉を意味するといったようなことです。つい、信じるか信じないかはあなた次第です、と続けたくありませんか？

21歳でALSという難病にかかり余命宣告を受けた後、研究をつづけた彼の精神力やものの考え方は、私たちにも見習うべき点が多くあります。天才はどのようにして天才になったのか。ぜひ、彼の自伝であるこの本を読み、これからの人生の助けにしてください。

『できないことを悔やむにはおよばない。私はだいたい何であれ、やりたいようにやってきた。』

## 今井司書のおすすめは…

297-カ 『極夜行』 角幡 唯介 著 文藝春秋

『地球上には極夜という暗闇に閉ざされた未知の空間がある。

それは太陽が地平線の下に沈んで姿を見せない、長い、長い、漆黒の夜である。』

一日のうち、一度も光の差すことのない闇が何か月も続く世界。気温は氷点下三十度とか四十度という極寒具合（それでも人間は次第にその寒さに慣れるらしい。すごい）。そんな極夜の世界へ、一頭の犬を相棒に連れ、著者 角幡さんは冒険に出ます。そこに待つのは、想像を超えるとんでもない悪天候やとんでもない絶望。心身ともに極限に追い込まれながらも、その果てしない闇の先に再び昇る陽の光を待ち望み、足を進めていきます。

とにかく過酷で、こんな冒険は絶対できないと思う反面、「このソリ、どのくらいの力で押せば動くのだろう」とか「アザラシの肉、私にも食べられるかな」とそんな想像を始めてしまうくらい冒険のおもしろさを随所に感じました。

うだるような暑さを一時忘れられるので、夏にとてもおすすめ。

